

前立腺がん 共に克服を

前立腺がんと闘う患者が、前向きに生きていくために集まって情報交換をする会が20日、郡山市で発足する。前立腺がんと9年間闘い続けている同市安積町長久保の松井清さん(66)が発起人となって呼び掛けたもので、「がんは死を意味するのではなく、治せる病気ということをやりたい」と話している。

患者の会 ききょう 発足

動物用医薬品メーカーの販売会社社長だった松井さんが、がんを告知されたのは57歳の時。尿が出なくなり、立っていることすらつらくなって検査を受けると、既に骨盤、脊椎、胸椎などに転移していた。余命半年との宣告に、妻尚美さ

んも「60歳から世の中のために働くという人生プランがある。死ぬわけにはいかない」と生きる目標を見いだした。

入院を拒んで自宅療養を選び、有効な治療方法を見つげるため何十冊もの本を読んだ。仕事も続けたが「足に約2リットル程度の食事療法をやらせようか」と思いで試した。家族も連日、同じテーブルで同じメニューを食べて励まし続けた。

2か月後、痛みが和らぎ始め、がんの進行により増える血液の中のたんぱく質が10分の1以下に減少した。「50歳歩くことすらできなかった」という体力も徐々に回復。わずか10日の交差点を渡った時「走れることに生きている喜びを感じた」。

前立腺がん患者の会設立者が集う松井さん夫妻

ん(62)は「ショックで氣力を失った」。

だが、当時20歳代だった2人の娘が「何かをやらなくて」と励まし、松井さん

の激痛で30分といすに座っていたらなかった。

その中で、動物性たんぱく質や塩、砂糖は一切取らず、にんじんジュースを



告知から4年後、がんを克服しているこうとする人とという意味から「がんこくじん」という名のホームページを立ち上げた。闘病体験を通じ、同じ思いをした患者たちの相談に乗りたいと思ったからだ。メールは毎日2〜3通届き、がんを闘う人たちの切実な言葉がつけられていた。ある男性とは3年間で50通以上のメールを交換した。

51歳で亡くなった男性の家族からは、「一時でも生きる希望を与えてくれたことに感謝します」という言葉が贈られた。この男性とは一度も会えなかったが、あきらめることなく、がんに向き合う人々と話し合いの場を持てたらと思いい、知人らに呼び掛け、「がんこくじん会」という名で会を作ることにした。

「私たちは本と医者だけが頼りだったが、がんを闘った経験者が持つ知識や情報があれば、きっと助かる命は増えるはず」と、松井さん夫妻。会だけでなく、がんの本だけを集めた図書館を作るといふ夢を持っている。

◇ 20日に郡山市のビッグアイで開かれる会合(午後1時〜4時30分)には前立腺がんについて医師らも参加し、がんを闘う男性2人が体験を披露する。会員は、前立腺がんの患者に限り、当日入会も可能。問い合わせは松井さん()へ。